

機関紙の役割

後藤隆徳

機関誌「れいほう」は、今月号で190号を数えた。第1号は、1994年2月20日発行。ページ数は8ページだった。

表紙は、2月16日・裾野市民体育館で行われた「結成準備会」の写真。次にスケジュール、等高線。準備会に集まった17名の「自筆名簿」はしっかり残されている。

会の結成は94年2月27日。3月末までに3号発行しているので、3+15年×12+7ヶ月=190号で号数は1号の欠号もなくドンビシャ合っている。



1号のページ数は8ページ、13号は23ページ、33号で38ページと次第に増え、以降は表紙を除き、当時の中身は40ページと決めていた。これ以上になると郵送料が膨大だからだ。

現在のページ数は大体14ページ前後が多い。ページ数は、会員が多く会活動が盛んなら当然増える。最高ページ数は、99年10月号の66ページ。機関誌というより本で、綴じるのに苦勞し嬉しい悲鳴を上げた。

毎月友好団体からも機関誌が何種類か送られてくる。一口に機関誌と言っても様々で、ひと桁のページ数のものから、50ページ近い大作を毎月発行している会もある。

性格として、出来事を速やかに発行するニュース性の強いものは「機関紙」。半年、一年、周年の活動をまとめ、記録を重視したものを「機関誌」と定義している。

「れいほう」は、一応両者の中間を狙ったものだ。経過報告を含めたニュース性と山行報告の記録性が中心。



機関誌の目的は「記録」がある。会の動き、山行記録、出来事など。その瞬間、いまの時代を正確に把握し事実を積み重ねる。

人間の記憶は不正確なものだ。何年か前の会報を眺めると、意外な「発見」の体験は稀ではない。出来るだけ正確に的確に、紙面が許す限り仔細に客観的に記録する。

意外なものが「写真」で、どんな美辞麗句より、たった一枚の写真が多くを正確に物語る場合がある。何年か前の写真を見て「あの頃は、髪の毛も多かったな～」と思うのは最たるものかもしれないが、、、。



次に記録されたものは多くの会員に「伝え」「広がる」。山行記録は、山行に参加しなかった会員にも記録を通して体験が共有される。

例えば、今夏の白馬連峰の花・展望の素晴らしさは、何人かの会員にしっかり伝わり、それは同化され、来年は是非自分も挑戦したいと「広がる」。

登山は昔から「読み」「登り」「書く」の過程がある。機関誌は正にそれである。読んで=心が揺り動かされ、登って=見て、聞いて、触れて、嗅いで体感し、書いて=体験を書くことで新しい発見を再認識する。そしてそれは、伝えられ広がりを見せる。

これは、登山の再生産である。新たな「発見」は、新たな「登山の出発点」となる。「読み、登り、書き、発見し」「伝え、広げ、共有し」仲間との新たな登山を創造していく。

最近ネットも盛ん。山行記録をHP担当者に電送すれば、写真入りですぐ上がる。将来はペーパーレスになるかも知れないが、それではやっぱり寂しいですね。